UrbanDesignLab.Magazine

2018.03.16
vol. 263

マガジン13年のあゆみ

Tracing of Urban Design lab. Magazine for 13 Years

はじめに p.2

Ⅰ.263号の特集記事目録 p.4
Ⅱ.歴代編集長による「2018年の編集後記」 p.8
編集部からのひとこと p.12

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/

編集長：　松田季詩子
編集委員：神谷安里沙　田中雄大　中村慎吾
岡山紘明　但馬慎也　中戸翔太郎

13年

都市デザイン研究室マガジンは2005年４月より新聞記者の経験もあった学生の酒井憲一の発案により創刊しました。以来、現在までに13年間、263号積み重ねてきました。1988年より研究室に在籍される西村先生の来歴のおよそ半分の期間を発行し続けてきたことになります。このマガジンは当時の研究室で起こった出来事を振り返るアルバムの役割であるとともに、学生の興味関心を追求し表現する場にもなっています。都市デザイン研究室マガジンは学生の拙著ですが、研究室を語る上で、なくてはならない存在なのです。

263号

もくじ

はじめに p.2-3
263号の特集記事目録 p.4
・記念記事一覧 p.4-5
・連載記事一覧 p.6-7
歴代編集長による「2018年の編集後記」 p.8
マガジンのこれから p.12

2005

2006

2007

2008

2009

2010

2011

2012

2013

2014

2015

2016

2017

263 号の特集記事目録

What we have reported for 13 years.

記念すべき第１号！　2005 年４月 15 日

~ 初回編集後記より ~

新歓コンパで、ハノイ旅行で生々しい古都水害地突破ルポを書いた黒瀬 M2 に、「爆発的に充実している研究室に何かマガジンが創刊できないだろうか」と相談しました。直後に西村教授の「研究室のホームページをどしどし活用してほしい」とのスピーチがありました。昨年の研究室忘年会での「時間は闘ってつくるもの」という同教授の檄も念頭にあり、学年初めを逃すなとまず私がテスト版をつくり、研究室の賛同を経てここに『都市デザイン研マガジン』が実現しました。先輩とのコミュニケーションも期待されます。研究室のホームページで連載されます。（初代編集長・酒井氏）

歴代編集長５代の対談企画。
「不易流行」という理念の登場！

第 100 号（2009.7.10）

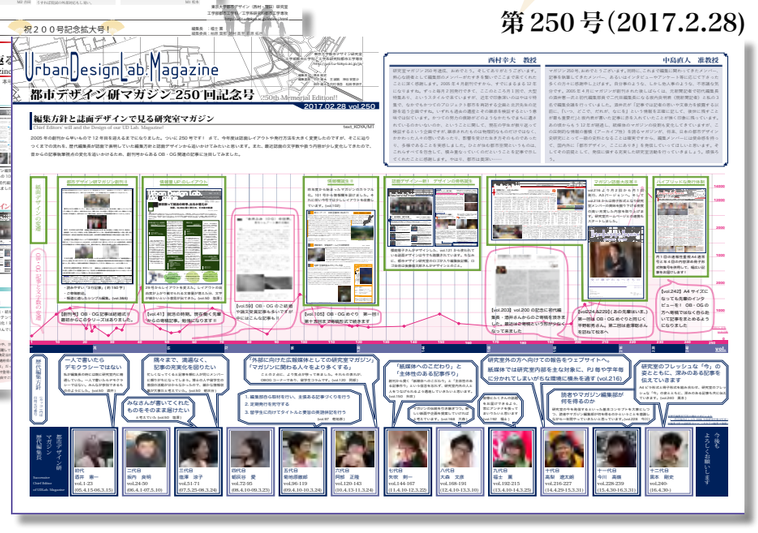
先生方から今後の激励。多様な視点や活動の背景等、「今」を伝えるべし。

第 150 号（2011.7.10）

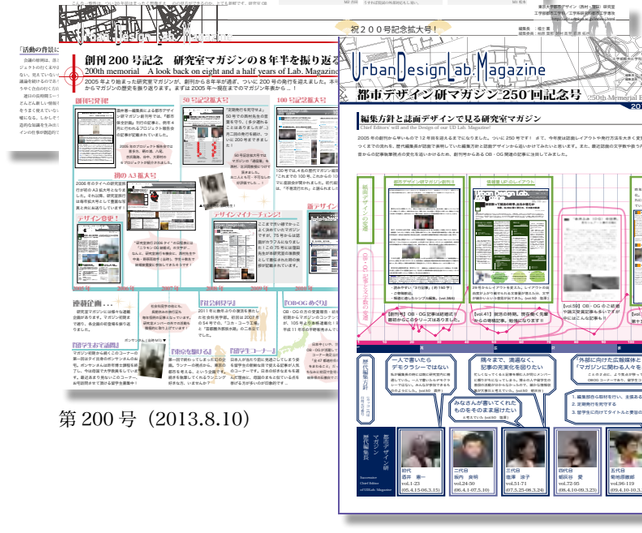
第 50 号（2007.5.10）

昨年度末、ついに 250 号を突破しました。
300 号到達は 2021 年４月号…？

第 250 号（2017.2.28）



第 200 号（2013.8.10）



▶このたび編集部では、研究室の大事な年間行事から編集部の世代を超えた長寿企画に至るまで、全 263 号にわたる特集記事を整理した目録をつくってみました。全記事を読むには膨大な時間がかかりますが、このまとめを見れば研究室の雰囲気が少し分かるかもしれません。ヘビーな愛読者のみなさまの「あの記事、どこだったっけ…」という索引にもどうぞ。（松田）

研究室の行事をレポート -13 年間、恒例の行事は毎年欠かさず特集。特別なイベントも！

新入生紹介

2015.04 Vol.228「新メンバーを迎えて」より

研究室の新たなメンバーを毎回取り上げていたマガジン編集部。どの代も個性豊か。

vol. 28, 48, 53, 62, 72, 76, 85, 96, 99.9, 109, 120, 121, 124.9, 146,147, 157, 168, 170, 181,193, 205, 216, 217, 223, 228, 231, 234, 240, 241, 252, 253, 258

研究室旅行記念号

2012.08 Vol.176「研究室旅行 2012 in 台湾」

２年に１回行われていた研究室旅行。現地の西村先生の教え子の先生とお会いする事もあった。

vol. 1, 2(2005 年： ハノイ), 38（2007 年：タイ）, 84, 86,（2009 年：マレーシア）133（2010 年：南京）, 176（2012 年： 台湾）, 222 (2014 年:杭州）, 247（2016 年：タイ）

忘年会、１年を振り返る

2007.12 Vol.64,65
「2007 年を振り返る」

年末恒例、本郷「鳳鳴館」での忘年会！初期は先生方のスピーチが掲載されていました。

vol.18, 42, 64-65 合併号 , 66, 88-89 合併号 , 90, 91, 112, 113, 114, 115, 136, 137, 160, 162, 184, 186, 208, 210, 235.9 , 260

卒論・修論・博論紹介

2006.2 Vol.21
「知の黄金週間、修論発表会でクライマックス」

学生の研究活動の集大成である論文・設計についてもばっちり特集！

vol. 20, 21, 44, 67, 69, 92-93 合併号 , 117, 140, 141, 142, 165, 177, 178, 188, 189, 212, 213, 214, 226, 238, 244, 251, 258, 262

西村先生還暦記念号

西村先生の還暦祝いで組まれた特集号！これまでの先生の経歴を振り返った紙面となっています。

第 173 号・174 号 (2012 年６月 25 日号・７月 10 日号)

■ 編集部による企画の数々！

新入生紹介や論文紹介のような恒例記事から、社会科見学や個人旅行、研究室の日常まで。様々なことがマガジンで取り上げられてきました。ここに掲載されているのはほんの一部、ぜひこれを機に 263 号を見直してみてください。（但馬）

日本全国 OBOG めぐり

日本全体に散らばる都市デザイン研の先輩を訪ねる企画。
活躍の幅の広さを実感できます。

105, 107, 110, 118, 120, 124, 137, 150, 157, 170, 179, 188, 193, 198, 206, 224, 229, 246

"人"を掘り下げる

留学生の記事

留学生の方々に関する記事。初期のお宅訪問や、鄭一止さんの "My Favorite Town"、留学生コーナーなどその中でもたくさんの記事がありました。

vol.30, 42, 49, 50, 52, 66, 102, 113, 121, 126, 128, 135, 148, 154, 159, 164, 169, 172, 174, 180, 186, 187, 191, 196, 201, 210, 213, 258

Road to Doctor

人生の先輩である博士課程の方を取り上げた企画。
189 号には森先生も登場しています。

vol.165, 175, 183, 189, 195, 200, 209

まち大コーナー

まちづくり大学院の方々にフィーチャーした企画。
社会人として研究をする人たちに迫っています。

vol.173, 178, 182, 190, 199, 202, 207

海外からの寄稿

海外に留学していた皆さんからの報告。
日本とは違う世界を紹介してくれました。

vol.103,133, 134, 162

結婚 & 出産

マガジン初期は、OBOG の結婚式レポートなどの企画がありました。
どなたに関する記事かは辿ってのお楽しみ。

vol.1, 15, 67, 171, 217

マガジン版 自著を語る

西村先生のこれまでを、先生が書かれた書籍とともに振り返る特別企画。「都市保全計画」から「県都物語」まで、幅広く登場します。

vol.254(初回インタビュー), 255, 257, 259, 261

北沢先生特集

都市デザイン研究室の教授を務められていた故・北沢猛先生の功績を辿る企画。
230 号からはリレー形式のインタビューを実施。

vol. 118, 119, 125, 230(鈴木伸治先生), 235(遠藤新先生), 242(野原卓先生・横浜), 248(信時正人氏・喜多方)

都市デザイン研マガジン２３０号。小さな節目を迎えたマガジンでは、初の試みとなるリレー形式のインタビュー特集に挑みます。特集のテーマは、故北沢猛先生。北沢先生が亡くなられてから６年が経ちますが、研究室にいると日々いろいろな人が「北沢先生はね、・・・」と、北沢先生のことを口にします。一体どんな方だったのか、編集部では先生の７回忌にあたる今年、改めて北沢先生にスポットを当てて、じっくりと北沢猛という人物に迫ってみることにしました。

vol.230 号「師の軌跡を辿って」序文より

夏の旅行記 夏休みの過ごし方

長い長い夏休みは学生の特権かもしれません。都市デザイン研究室で駆け巡った距離は月に届くのか（245 号より）

165, 175, 183, 189, 195, 200, 209, 233, 245

旅行記

個人旅行 帰省

個人旅行の記録は留学報告や夏休み特集にも多く含まれています。各地から学生が集まる都市デザイン研ですが、故郷自慢の記事は意外と少なめ。

43, 122, 234, 245, 256

社会科見学

マガジン 54 号にて発足した、社会科見学部。目的は「まちあるきでは見ることのできない施設単体から都市活動をもう一度見つめ直すこと」でした。

54, 129, 138, 156, 163, 194

挑戦・表彰

国際交流

都市デザイン研に訪れる学生と交流したり、また海外のワークショップに参加したり、実は国際交流も盛んです！

13, 51, 56, 78, 115, 116, 127, 155, 198, 203, 204

学会発表

研究の成果を発表する学会の場。
海外の学会で発表することもあります。

49, 72, 154, 179, 202, 221, 245

コンペ

有志で都市設計コンペに挑戦する様子を取り上げた記事。
昨年はまちづくりコンペで国土交通大臣賞を受賞しました

5, 9, 31, 59, 109, 130, 132, 197, 232, 249, 254

受賞報告

論文・設計が表彰された時はもちろん取材！
並べてみるとその多さに驚かされます。

9, 28, 59, 99, 101, 103, 123, 125, 130,132, 148, 151, 155, 171 196, 197, 218, 221, 245

研究室生活

研究室 大掃除

どうしても汚くなりがちな研究室では、大掃除が大きなトピックに。
今年３月末にフリースペースになった９階（252 号）ですが…

12, 25, 46, 47,116,144, 252

就職関連の話題

学生にとって、やはり就職活動は気になるところ。
最近は、社会人の方に話を聞く「としとーく」も開催されています。

12, 25,41, 106, 224, , 249

追いコン

学期末には去っていく先輩方からコメントをいただく「置手紙」企画があります。
今年はついに西村先生の置手紙になります…

24, 45, 71,95,96,108, 119,143,167, 192, 215、239, 251

2018 年の編集後記

Editor's Note 2018

マガジンは今年で 13 年目を迎えます。13 年間それぞれの年に一人、編集長がいます。今回年度ごとに 13 冊に分冊した総集編を作成し製本するにあたり、各巻の最後にその年の編集長から『2018 年の編集後記』と称してコメントをいただきました。彼ら・彼女らのコメントをまとめてみると、編集長という立場の責任と思い出を垣間見ることができました。

2005/1st

初代編集長・酒井憲一

マグマを後世に

ハノイ研究室旅行のクルージング船上から取材を始めた「都市デザイン研マガジン」創刊号。研究室超々満員時代、研究生の私は廊下立ち席に弾き飛ばされていた。そのマグマの熱気を後世にまで伝えたくて、責任編集でスタートした。西村教授情熱のマグネットの鏡である。まだまだ「紙」時代だったので、メルマガと同時にプリント配布もした。それからあれよあれよと、高度なデジタル編集になり、充実本体のほか、夢のようなアレンジ版や英語バージョンもでき、編集部は最大規模になった。一覧性に難の編集もあったが、新方式で克服され今至上である。

2006/2nd

第 2 代編集長・坂内良明

2007/3rd

第 3 代編集長・塩澤涼子

マガジンも 200 号を超えて長年の継続に本当に敬意を表します。私がデザ研に入ったのが 2006 年、当時は坂内さんが一人で担当されていて、「坂内節」は以降継承…できなかったと思いますが、「研究室の今」を発信するべく試行錯誤しました。紙面デザインを変えて、たくさん情報を掲載できるようになった一方、月 2 回発行というハードスケジュール＆時折訪れるネタ閑散期の紙面編集的には自らの首をさらにしめることになりました。ただ、今に至るまでそのペースが継続されているのは研究室活動が一層活発な証ですね！

2008/4th

第 4 代編集長・蛎灰谷愛

2008 年当時は 100 号に満たなかったと思いますが、いまや 300 号が見えてきているとは…。マガジンの歴史の積み重ねと、自分もその一部に居られることを嬉しく思います。ふせんに 1 人 1 人のお名前を書いて配っていたことも懐かしいです。さすがに今はもうやっていないでしょうか？

個人的に今でも思い出すのは（もしかしたら私が編集長になる前かもしれませんが）、中島直人先生の結婚式の記事です。明日館の美しさと、中島先生ご夫妻のお人柄と、野原先生の文章から優しさがあふれて、素敵だな〜！と憧れたのを覚えています。

2009/5th

第 5 代編集長・菊地原徹郎

2009 年度の編集長当時、マガジン発行は研究室内の情報共有目的という認識しかなかった気がする。しかし今振り返ると、「ある一つの活動報告書」を執筆していたことに気づく。学生誰もが一度は記事を執筆したことがある研究室マガジンは、個々の論文やプロジェクトごとの活動報告書と異なり、全ての学生が作成に関わった唯一無二のアウトプットであり、西村幸夫先生率いる都市デザイン研究室の研究活動の「完成書類」ではなかろうか。

第 6 代編集長・阿部正隆

「100 号から 200 号へ－何でもやってみよう－」

思い起こせば 100 号記念が初めての編集担当でした。対談での歴代編集長、先生方の示唆を受け止め、コレカラをどう考えるか。内向きの情報ばかりでなく、自ら感じたものを誌面で表現する、多様な方々に書き手になってもらう etc。

主張や思想がないと言われ続けたマガジンでしたが、編集会議で「何でもやってみよう！」となったら、メンバーの個性が暴走。この代に始めたことは数多く。フォーマットデザイン、アイコン、情報欄、取材企画、多言語、SNS ほか、今に続いているものもあり、「不易流行」の思いをつなげられた！？

＜以下、2009-2010 年度　第 5- 6 代編集部　同期メンバーより＞

私はいつも編集後記から書いていました。夕陽が沈む頃でしたね、コーヒー片手に穏やかな気持ちで。さて、120 号のフォーマットデザインのリニューアルについて。春の新体制への決意を込めて、思い切ったことをしましたね。そして今も継承していただきありがとうございます！そろそろですか？笑毎年新しいことが生まれるマガジン。最近では研究より熱が入っているという噂も。今もこれからも、コーヒー片手に拝読させていただきます！（櫻庭敬子）

OB・OG めぐり、社会科見学、キャンパス歩き etc。「自由にやっていいよ」と言われたので、関心のあることを色々やらせてもらいました！が、「オレンジ色使い過ぎ！」「紙面使い過ぎ！」とたくさんの注意をいただいた覚えが。。。マガジン編集部、自分の関心を深める貴重で楽しい時間でしたが、もしかして向いてなかった！？笑（鈴木亮平）

マガジン編集部の仕事は、ネタに困って皆で頑張って捻り出し、〆切に悩まされてあくせくしていたという、悩んで焦って、という記憶です。笑ただ、改めてＨＰを見ると、自分達の後も後輩の皆さまがきちんとこの襷をつないでくれていること、そしてそのリレーによってＨＰがとても読み応えあるコンテンツになっていることに感心しました！長く受け継がれてきたこの伝統を、これからも変わらず続けて頂ければと思います！頑張ってください！（山下航司）

2010/6th

2011/7th

第 7 代編集長・矢吹剣一

編集長時代というよりも修士時代の振り返りになってしまいますが、アクティブなプロジェクトが 13 ほどあり、修士だけで常に 20 名弱在籍していたので、本当に毎日忙しなく過ごしていた記憶があります。作業は大変でしたが、大家族のような雰囲気のなか和気藹々と活動していて、充実していました。そういった意味では、各人の活動内容を共有するためにマガジンが重要な役割を果たしていたのかな、とも思います。編集長としてはチェックが雑だったので、メンバーにだいぶ助けてもらっていた気がします（笑）。また、当時は「主体性のある記事作り」を標榜しており、今何を問うべきか？を意識的に考えようと編集部として努力していたと思います。もう一つ、重要な出来事は東日本大震災です（M2 になる前の春休みでした）。大槌 PJ などが開始され、復興に取り組み始めたのもこの頃です。研究室として「都市デザイン」というものを見つめ直し始めた時期だったのではないかと思います。

2012/8th

第８代編集長・大森文彦

2012 年度にマガジン編集長を務めた大森です。西村先生、このたびはご退官おめでとうございます。今思い出しますと、私の台のマガジンでは、博士課程の研究紹介や OB・OG からの寄稿にも力を入れていました。多くの方のご協力に支えられて、マガジンが成り立っていたのだと改めて感じるとともに、多くの寄稿をいただいて､逆にレイアウトに苦心した記憶もございます。研究室･まちづくりのライブ感を伝える、貴重な経験でした。

2013/9th

第９代編集長・福士薫

編集長に指名されたとき、自分には絶対に務まらないと内心泣きそうになりながらも、見栄をはって「しっかりやらせていただきます」などと大口を叩いてしまったのをなつかしく思い出します。優秀な編集委員たちと、寄稿してくださったみなさんに毎号本当に助けられました。200 号の節目を迎えたときに、改めてマガジンの歴史や歴代編集長の熱い思いを振り返ることができたのも良い思い出です。これからも研究室の今が詰まったマガジンを楽しみにしています。

2014/10th

第 10 代編集長・高梨遼太朗

先生方の熱意に惹かれて都市デザイン研究室に入りましたが、同期に「プロジェクトばかりやって、研究しなくていいのか（いや、良くない）」とよく問われました。そんな中、マガジンまでも在り方を問い直し、実質実務量を増やしてしまい後輩に多大な迷惑をかけてしまったのではないかと、よく心配になります。(申し訳ないです。。)

都市デザイン研究室は多数のプロジェクトと無数の魅力的な先輩を内包する組織です。研究内容は研究室会議にて共有／議論され、論文という形で蓄積されますが、プロジェクト等の知見／発見は充分にプロジェクト間の共有／議論／蓄積されていないのではないか。そんな問題意識から、本気でプロジェクトにも取り組む上で先輩方の肩に乗り、ディープな議論に火を付ける事が都市デザインマガジンの役目なのではないかと思い編集長になりました。逆にそれが出来ないのであれば、本当にやめていいんだろうなと思っておりました。

実際はチームに（物凄く）恵まれ、各メンバーは目標に共感してくれ、あっという間にマガジンは新しい形になりました。記事をお願いするだけでなく、実際出向きインタビューを行う事で、編集員としての疑問点／議論の火種を掘り起こす事に注力しました。本当に楽しかったなと思います。

上記は私の勝手な問題意識と目標でしたので、完全学生自治組織のマガジンとして各代の皆様が自由に使いたいようにマガジンを使って欲しいです。高梨とかいう先代が勝手に増やした実務に嫌々付き合い、老害扱いするみたいのだけは勘弁して下さい。。！笑

2015/11th

第 11 代編集長・今川高嶺

2016/12th

第 12 代編集長・黒本剛史

古今プロジェクトの現場、集大成の修士論文にかけた思い、OBOG の華々しい活躍。マガジンというチャンスを借りながら、生で触れ、学び、心動かされる体験をたくさん頂きました。それを伝える役目でありながら、紙面や表現力の制約で、感動の全てを伝えきれないわけですが、それでもやはり、繁忙の中で見過ごしがちな研究室の隅々の宝たちを見つけ出し、入口を開いてきた役割は偉大なのでしょう。益々の進化に期待しています。

2017/13th

第 13 代編集長・松田季詩子

重くも面白くもある節目の年、同期や後輩と手探りで進んできました。やるからには興味を深く追求しなきゃ、書き手の思いとしての「主体性」を出そう、web 媒体の記事を活かして、ただ情報共有媒体としての総覧性は必要で、そして何より、マガジンばかりやらないように本業をしっかりと。進化とともに色々な要素が増えたマガジンに、節目らしい落としどころを少しでも用意できたでしょうか。

13 代にわたって、初心の伝統と各年の個性を火花のようにぶつけ合いながら繋いできたマガジンは、その身で都市文化の継承を体現しているかのようです。その軌跡としての 13 冊を、今回先生にお渡しできることを、最若輩として誇りに思います。今後は、毎月のメールと、いつかの依頼メールを楽しみに待っております。

To 2018/14th...

都市デザイン研こぼれ話　-“ あの ” ロゴマークの由来 -

このロゴマーク に見覚えはないだろうか。最近ではマガジンの裏表紙などに使われたりもして親しまれているこの研究室のロゴ、ついに作成の経緯が明らかとなった。作成者の後藤さん・金井さんのお話を伺うことができたので、ここに記しておきたいと思う。

“17 年ほど前、自分の名刺は自分でデザインしていました。ただ、名前と連絡先だけでは寂しいので、当時なかった研究室のロゴを二人で作り名刺に入れたのが始まりです。せっかく作ったので、と勝手に研究室のドアに貼り出したまま卒業しましたが、まさか今までこのマークが公式に（?）生き残っているとは思いませんでした。スプロール化したりスポンジ化したりと形も質も日々変容し捉えどころがない都市のイメージを、アメーバになぞらえて表現したようにうっすら記憶しています。

最近は、街並み保存や都市開発といったハードのデザインだけでなく、ソーシャルデザインやコミュニティデザインといったソフト寄りのデザインも注目され、デザインという行為に求められるものがさらに変容し拡張しています。時代によってアメーバのように形を変える「デザイン」を駆使して、都市にアプローチしていってください。”

平成 13 年卒業・第 36 期　後藤倫太郎／金井和哉

編集部からのひとこと

Announcement by Editor Members

本誌ではこれまで、アーカイブスや歴代の編集長の文章から、都市デザイン研究室マガジンを紹介してきました。最後に今年度の通常冊子以外の取り組みを４つのポイントに絞って掲載します。マガジンは歴代の改良によって毎年多少変化してきました。来月から新体制になるため内容も変わるかもしれません。しかし、研究室の活動を誌面に刷るその熱いマインドは初代から変わることはありません。変化を柔軟に取り入れながら、根っこは動じない。「不易流行」のマガジン、これからもご愛読のほど、よろしくお願いいたします。

ブログでリアルタイムの更新！

各プロジェクトの進捗や研究室の出来事を研究室報告。月に 3~4 回更新しています。

< http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/ >

月刊誌で深く知る特集号

編集部がその月にちなんだ記事をまとめます。とくに３カ月に１回、編集者の興味関心基づいた特別号を冊子形式で発行しています。

全て WEB で読み放題！

ホームページでマガジンのアーカイブスを設けています。第１号から最新号まで、いつでも閲覧できます。

< http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/mag_archives/ >

ご意見などお待ちしています！

マガジンではみなさまからのご意見ご要望を冊子に取り入れたいと思っております。宛先はこちら↓

< urbandesignmagazine@gmail.com >